

分かる喜びを知り、自ら主体的に学ぼうとする子の育成 ～基礎基本の定着を図り、確かな学力の向上を目指す～

御所市立掖上小学校

平成 20 年度より「全国学力・学習状況調査結果を活用した調査研究」の実施校として、本校児童の学力向上を目指して取組を進めてきた。過去 2 年間の取組では、「知識・技能」の部分でほとんどの学年で一定の成果が見られた。その一方で、少し難しい問題に直面した時に「自ら考えようとなしないう」「すぐにあきらめてしまう」児童、「活用力・表現力」が乏しい児童の実態や、基本的な生活習慣や家庭での学習習慣が定着していない、単に学校の取組の強化だけでは解決することのできない実態が見られた。家庭の支援、協力を得ながら進めていくことが学力向上には欠かすことができない要素であることを確認し、取組を進めてきた。

昨年度は萱野小学校から、学び合いの授業形態やメタ認知が働く子を育てる具体的な取組を学び、三重大学附属小学校の研究発表会からは、本校でも取り組める内容を多く学んだ。また、すずかけタイムや算数チャレンジタイムの取組も定着し、児童の学力向上につながっている。家庭学習支援研究部から出された保護者への啓発プリントや、生活記録票も、学年末に行ったアンケートの結果、子どもたちの学習意欲向上や保護者の関心の高まりにつながっていることが分かった。

今年度は、より一層基礎基本の定着を図りながら、言語活動を効果的に活用し、思考力・判断力・表現力を高める授業の在り方についての研究を中心に、下記の柱を立てて取組を進めてきた。

主題に迫るための 三つの柱

- 1 教員の指導力を高める取組
- 2 基礎基本の定着を図る取組
- 3 家庭学習を充実させる取組

(1) 学力調査活用アクションプランを活用した取組の実際

①教員の指導力を高める取組（授業力向上研究部）

自ら考え、問題を解決しようとする子どもを育てるために

本校児童の「全国学力・学習状況調査」結果では、記述式問題の正答率が低い実態がある中で、児童の様々な考えを引き出したり、思考を深めたりするような発問や指導を工夫したり、児童の発問や活動の時間を確保して授業を進めたりするなど、言語活動を積極的に取り入れた授業を工夫し、児童の主体的な学習を充実させる。

○各学年の推進計画を立てる。

○研究授業を通して学び合う。

| 日 程 | 学年・組 | 授業者 | 教 科 | 指導助言者 |
|---------------|---------|-----|-----|---------------|
| 6 月 16 日 (水) | 4 年 1 組 | 橋 本 | 算 数 | 県指導主事 椿本剛也先生 |
| 6 月 30 日 (水) | 5 年 | 岸 本 | 算 数 | 県指導主事 椿本剛也先生 |
| 10 月 13 日 (水) | 4 年 2 組 | 西 浦 | 人 権 | 大福小学校 佐藤千恵美先生 |
| 10 月 27 日 (水) | 1 年 | 松 本 | 算 数 | 県指導主事 椿本剛也先生 |
| 11 月 10 日 (水) | 2 年 2 組 | 水 田 | 人 権 | 元教員 谷本恵子先生 |

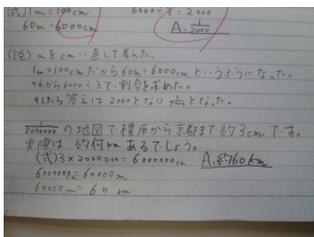
○様々な場面における「言語活動」を重視した取組

ア 算数科

言語活動を通して付けたい力

算数的活動を通して、計算の意味や計算の仕方・図形の面積の求め方などを、具体物を用いたり、言葉、数、式、図、表、グラフなどを用いたりして考え、説明・表現する活動を行うことで、数学的な思考力・表現力を育てる。

このことを意識して、どの学年も、児童が課題に対してまず自分で考える。その考えを式・図などを用いてノートに書いたりして、となり同士やグループで互いに意見を交流する。そして全体の場で相手に分かりやすく説明するといった授業形態を心がける。意見を交わすことの楽しさや、友達の考えからの発見や学び、自分の考えを発表する満足感・成就感を味わうことを通して主題に迫りたい。



〔第6学年算数「比」の学習から〕

イ 朝の会・帰りの会・学級活動などを利用したスピーチタイム

毎日の継続的な取組として、各学年でスピーチタイムを実施している。高学年では、スピーチメモを持たせ、翌日のスピーチで話す内容の構成を考えさせている。また、学級活動や国語の時間を利用して、サイコロトークなどテーマを決めて人前で話したり、聞き合う活動をしたりしている。これらの活動を通して人前で話すことに抵抗をなくしていくこと、人の話をしっかりと聞くこと、互いのスピーチを通して互いを知るといった集団づくりにも役立っている。



〔第6学年朝の会〕



〔第1学年帰りの会〕



〔第1学年自分の気持ちカード〕

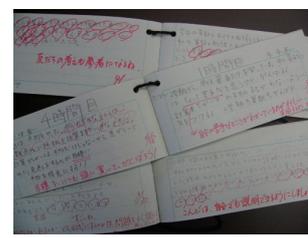
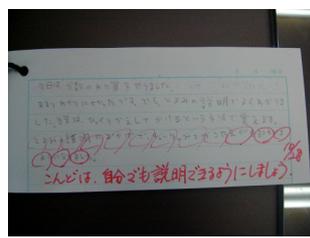
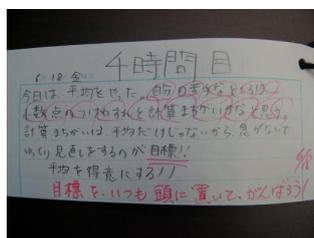
○授業公開週間を設けて、授業の公開を行う。

ア 6月7日(月)～11日 高学年(第4、5、6学年)

イ 11月15日(月)～19日 低学年(第1、2、3学年)

参観者が「よかったところ」「気になったところ」などの感想を参観用紙に記入し担任に伝える。

○算数日記に取り組む。(全学年で徹底する)



算数日記のねらい

学習内容を振り返り、分かったことや、さらに出てきた疑問に気付くことができる児童を育てる。

児童への働きかけ

今日の算数の時間で、分かったこと、分からなかったこと、友達の考えなどでよかったところなどを書こう。

更なる成長のために

学習を振り返って書いている算数日記はみんなに紹介する。

日記の内容がねらいに合ったものになるように、適切なコメントを書く。

○各種研修会への積極的参加

名柄小学校 平群西小学校 箕面市立萱野小学校 三重大学附属小学校など

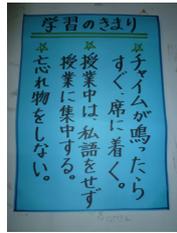
②基礎基本の定着を図る取組（基礎学力研究部）

○「すずかけタイム」（毎朝の15分間）を活用し、日常継続的な取組を充実させる。

| 月 | 火 | 水 | 木 | 金 |
|-----------------|----|----|----|----------|
| 朝礼がない週は 学級裁量 | 読書 | 視写 | 読書 | 算数(計算領域) |

○「読書の木」「読書カード」の作成（校内環境整備）

○「話し方の基本話型」「学習規律」の作成（教室環境整備）



（読書の木）



（読書カード）

○算数チャレンジタイムを実施し、低学力の克服に努める。（火曜日放課後）

- ア 毎週火曜日放課後実施。（第1、2学年は6時間目。第3～6学年以上は7時間目。）
- イ 算数科に課題をもつ児童を対象に行う。
- ウ 対象児童については、保護者に主旨を説明し、理解を得る。
- エ 学習内容については、各学級担任が児童に合った課題を設定し、指導する。
- オ 算数に対する苦手意識の克服や分かる喜びを味わわせる。

○授業開始10分間で行う基礎学力の充実

- ア 国語……ミニ漢字テスト（その日のうちに返し、次への意欲をもたせる。）
音読（教科書教材を順番に読ませる。）
- イ 算数……百マス計算等、「数と計算」の領域に絞った復習を行う。
第4学年以上では、特に筆算の定着を図る。

○個に応じた学習に対応した問題データベースの導入

（活用例）

- ・各単元の「ドリルプリント」を家庭学習にして取り組ませ、確かめさせる。
- ・各単元の「ドリルプリント」「フォローアッププリント」「たしかめプリント」「チャレンジプリント」と各自の習熟度に合わせて取り組ませる。

③家庭学習を充実させる取組（家庭学習支援研究部）

○家庭学習についての実態アンケートを実施する。

○家庭学習の内容や量などについて全職員で共通理解を図る。

○保護者への啓発を図る。（低・中・高学年別にプリントの配布）

- ・家庭学習の重要性に関する学校の方針を伝える。
- ・家庭における学習時間の確保。
- ・基本的な生活習慣についての呼びかけ。（早寝早起き・朝食・ゲームの時間等）

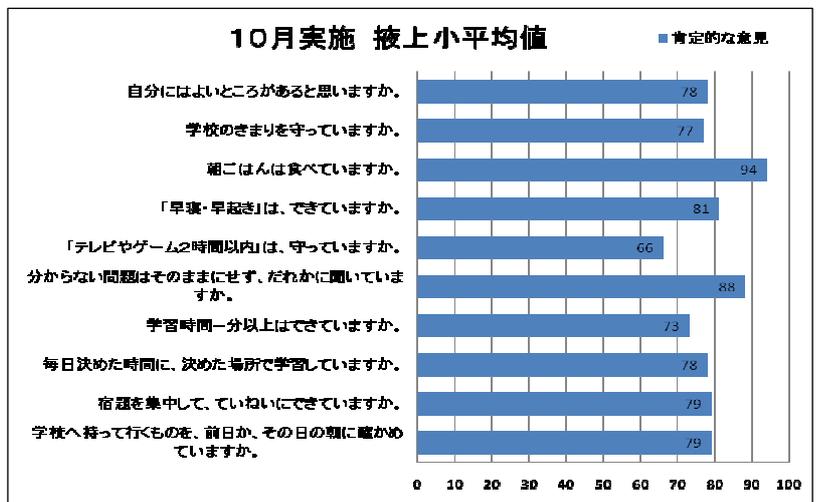
○生活記録票

- ・月1回、一週間を通して家庭学習の状況の把握。（保護者が生活記録票にコメントを記入）

○生活アンケートの実施（5月・7月・10月・2月に実施）

○成果として見えてきたもの

- ・アンケートをとることで、教



員側のねらいも明確になり、学級での声かけが具体的かつ継続的にしやすくなった。

- ・分析・考察を行うことで、児童の家庭での学習状況について考え、学習時間だけでなく「学習の質」に目を向けることができた。
- ・分析・考察を行うことで、家庭との連携も課題を明確にして行うことができた。
- ・学級では、宿題の提出物がなかなか揃わなかったのが、一回で揃うようになった。また、漢字や計算もていねいに行う児童が増えていった。

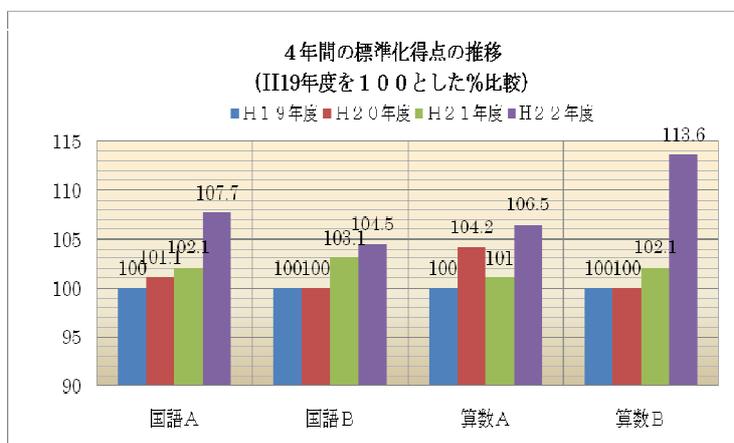
(2) 結果と考察

①全国・県との比較から見た学力

○全国学力・学習状況調査結果

平成 19 年度の本校児童の標準化得点を 100 とし、この 4 年間の標準化得点を算出した(グラフ 1)。対象児童が異なるので一概には言えないが、今年度は、正答率が国語 A・算数 A・B で 0.3~3.1 ポイントではあるが、初めて県平均を上回った。下回った国語 B でも、2.5 ポイント差であった。この 2 年間の成果と考えられる。

グラフ 1



○県学力診断テスト結果

国語科においては、第 5 学年を除いて県平均を下回っているが、平成 21 年度に比べて、その較差は縮まってきた。

算数科においては、第 1 学年を除いた全ての学年で県平均を上回った。特に第 6 学年は、前年が -1.2 であったのが今年は +13.5 となり、約 15 ポイントの上昇となった。同様に第 2 学年も -8.8 から +1.6 と約 10 ポイントの上昇が見られた。算数科に絞った取組の結果が表れてきた。

表 1 奈良県県学力診断テストとの正答率較差

| | | H19年度 | H20年度 | H21年度 | H22年度 |
|----|----|-------|-------|-------|-------|
| 国語 | 1年 | -15.1 | +0.7 | -12.6 | -10.7 |
| | 2年 | -3.8 | -5.6 | -9.1 | -4.0 |
| | 3年 | -7.7 | +1.9 | -9.2 | -1.6 |
| | 4年 | -3.6 | -3.4 | +6.1 | -4.5 |
| | 5年 | -10.6 | -4.5 | -8.4 | +1.6 |
| | 6年 | -8.0 | -4.6 | -9.0 | -7.0 |
| 算数 | 1年 | -15.4 | -3.5 | -8.8 | -4.3 |
| | 2年 | -2.7 | -2.7 | +5.7 | +1.6 |
| | 3年 | -3.3 | -3.8 | -3.2 | +3.3 |
| | 4年 | -1.5 | -2.0 | +12.7 | +2.3 |
| | 5年 | -9.0 | -4.6 | -1.2 | +0.8 |
| | 6年 | -12.7 | -2.7 | -2.3 | +13.5 |

○指導工夫の改善に関するアンケート結果(第 6 学年対象)から

<評価指標 2>

- ・「普段の授業で自分の考えを発表する機会が与えられているか」
肯定意見 (4月) 54.0% → (1月) 94.2%
- ・「普段の授業では、学級の友達との間で話し合う活動をよく行っていると思うか」
肯定意見 (4月) 54.0% → (1月) 91.9%
- ・「自分の考えを他の人に説明したり、文章に書いたりするのは苦手ではない」
肯定意見 (4月) 29.8% → (1月) 41.6%

○学習意欲の向上に関するアンケート結果(第 6 学年対象)から <評価指標 3>

- ・「教科の学習が好きですか」という質問に肯定的に回答した児童の割合と、「教科の学習が大切だと思いますか」と回答した児童の割合の差を縮める。

| | 4月 | | | 1月 | | |
|----|-------|-------|------|-------|-------|------|
| | 好き | 大切 | 差 | 好き | 大切 | 差 |
| 国語 | 59.4% | 86.4% | 27.0 | 70.2% | 97.3% | 27.1 |
| 算数 | 37.8% | 83.8% | 46.0 | 89.2% | 94.6% | 5.4 |

- ・「教科の学習内容が分かりますか」という質問に肯定的に回答した児童の割合を増やす。

| | 4月 | 1月 | 差 |
|----|-------|-------|-------|
| 国語 | 70.2% | 89.2% | +19.0 |
| 算数 | 64.0% | 89.2% | +25.2 |

- ・「国語の授業で目的に応じて資料を読み、自分の考えを話したり、書いたりしているか」
肯定意見 (4月) 43.2% → (1月) 51.4%
- ・「国語の授業で意見を発表する時、うまく伝わるように話の組立を工夫しているか」
肯定意見 (4月) 37.8% → (1月) 51.4%
- ・「国語の授業で自分の考えを書く時、考えの理由が分かるように気をつけているか」
肯定意見 (4月) 67.7% → (1月) 86.5%
- ・「算数の授業で新しい問題に出会った時、それを解いてみたいと思うか」
肯定意見 (4月) 70.3% → (1月) 91.9%
- ・「算数の問題の解き方が分からない時は、あきらめずにいろいろな方法を考えるか」
肯定意見 (4月) 67.8% → (1月) 83.8%
- ・「算数の授業で学習したことを普段の生活の中で活用できないか考えるか」
肯定意見 (4月) 45.9% → (1月) 59.5%
- ・「算数の授業で問題を解く時、もっと簡単に解く方法がないか考えるか」
肯定意見 (4月) 75.7% → (1月) 81.1%
- ・「算数の授業で問題の解き方や考え方が分かるようにノートに書いているか」
肯定意見 (4月) 62.2% → (1月) 83.8%
- ・その他
「自分にはよいところがあるか」
肯定意見 (4月) 54.0% → (1月) 78.4%

〈考察〉

- 評価指標2では、「自分の考えを発表する機会」や「友達と話し合う機会」が大幅に増えているにもかかわらず、「自分の考えを発表したり、文章に書いたりすることが苦手」な児童が多いことが分かった。算数科だけでなく、いろいろな教科や場面でこのような経験を重ねる必要がある。
- 評価指標3では、まず、「好き」と「大切」の差を縮める項目では、国語科では「差」は縮まらなかったが、「好き」と「大切」がともに10ポイント上昇している。算数科では、「好き」が大幅に上昇し、「差」はかなり縮まった。
このほか、全体的に国語科に比べて算数科に関する項目で数値が上昇している。これは、昨年度・今年度と算数科に絞って取り組んできた成果といえる。同時に、言語活動の根幹を培う国語科での取組が不足していることの証左でもある。
自己肯定感については、24ポイント上昇した。これは、学力向上の取組だけでなく、学級経営の充実に向けた様々な取組があいまった結果である。

(3) 成果と課題

平成19年度の本校児童と全国との「較差」に衝撃を受けてから、あっという間に3年が過ぎてしまった感がある。1年目は、とにかく本校児童の学力の実態を何とかしようという思いで、先進校の取組に学びながら体制づくりや取り組むべき内容を明確化して取り組んだ。それこそ全教職員が同じ目標を共有し、実践していこうという意識や雰囲気確立した年であった。そこでできた流れは、2年目そして今年度と確かな取組へとつながっていったと実感している。

「教員の力量を高める取組」「基礎基本の定着を図る取組」「家庭学習の充実を図る取組」を三つの柱として全員で取り組んできたという一体感の中で、少しずつではあるが成果は上がってきている。

基本的な生活習慣や学習習慣、規範意識など、数値的にはまだまだ低いところがある。なかなか協力がもらえない保護者も少なからず存在する。まだまだ取り組むべき課題は山積している。とりわけ、(2)の考察でも述べたが、今年度取り組んだ「言語活動を効果的に活用した」取組を他の教科等にさらに広げていかねばならないと考えている。